土壌植物栄養研究　原稿執筆規程

（2016 年 2 月 12 日版）

1．原稿は「WJSSPN サイト，http://dgcbase.jp/wjsspn/」から投稿様式をダウンロードして，A4 判 1 ページ 25 行， 1 行 26 字，文字サイズ 12 ポイントで作成する．

2．掲載時の 1 ページは，26 字×25 行の原稿 4 枚に相当する．原稿の 1 行は刷り上がり片段 1 行になる．図は縦 5 cm が刷り上がり 10 行に相当する．表の 1 行は本文の 1 行にほぼ等しい．英文要旨は 300 語の場合，刷り上がり約半ページに相当する．

表題・著者名・キーワード・摘要

3．表題は内容を簡潔に表すものとし，○○の研究あるいは○○に関する研究，という表題は避ける．内容が密接に関連した複数の報文は，副題をつけた一組の原稿（例：○○モデルによる○○の解析 I.理論，II.数値例）として投稿することができる．これらの原稿は一括して審査され，それらのすべてが掲載受理となった後，同一号に掲載される．

4．表題，著者名の順に記し，所属機関を脚注に記入する．所属機関は研究の行われた場所とし，現在の所属がこれと異なるときも脚注に記す．原著論文以外はすべて，英文の著者名，クイトルを脚注に記人する．E-mai1 アドレス掲載希望者は，アドレスを脚注に記載する．

5．表題，著者名のあとに 1 行あけて 5 語以内のキーワードを，さらに 1 行あけて 26 字×20 行以内の和文摘要を記し，本文には要約等を含めない．掲載時には，原著論文では，和文摘要に続けて英文要旨を挿入する．

本　　文

6．本文は摘要のあと，３行あけて書き起こす．

7．見出し・小見出しの扱い方文章は 1,2,3･･･(章)，1),2),3)…(節)のように分け，必要に応じて小見出しをつける．章・節の番号はアラビア数字を用いる．見出し・小見出しには行をあけない．

8．文体ひらがな漢字混じりの横書き口語文とし，できるだけわかりやすい表現にする．

9．術語以外はなるべく常用漢字を用い，かなは現代かなづかいとする．

10．英数字には半角文字を用いる．

11．数字は一般にアラビア数字を用い，漢数字は普通の字句にのみ用い(例：二三の実例，十徳豆，農林 10 号，リン酸三カルシウム)，ローマ数字は番号を示す場合に限る．

12．外国人名は欧文とする．ただし，中国人名などは漢字でもよい．特に必要のないかぎりロシア文字などは用いない．本文中の人名には敬称をつけない．なお，術語になっている外国人名はカタカナ書きとする(例:ケルダール法,ストークスの法則)．

13．外国地名はカタカナを原則とするが，必要に応じて欧文を用いる．中国などの地名は漢字でもよい．日本の地名も読み方の周知されていないものはひらがなを併記する．

14. 量を表す文字はイタリック体にする（例：$PV=nRT$）.
15. 術語は原則として文部省編：学術用語集ならびに『土壌・肥料・植物栄養学用語集』（養賢堂）による．普通用いられる外国語の術語，物質名などはカタカナで書く.
16. 文章中においては，物質名はなるべく化学式を用いないで名称を書く（例:HCl, C_2H_5OH と書かないで，塩酸，エタノールと書く）.
17. 略字・略号を使うときは，初めにそれが出る箇所で正式の名称とともに示す［例：ペンタクロルフェノール（PCP），アデノシン三リン酸（ATP），陽イオン交換容量（CEC）］.
18. 原則として，動植物の名称はカタカナ書きにし，最初の記載の場合にのみラテン語による学名を付す．学名はイタリック体にする.
19. 肥料成分等の表示は元素表示を原則とし,必要に応じて酸化物表示を括弧内に併記する［例:10.0 kg-P ha^{-1} （22.9 kg-P_20_5 ha^{-1}）］.
20. 数量の単位は原則として SI 単位とする．数値と単位の間には半角スペースを入れる．参考例を末尾に示す．時間は 13 時間 6 分のように書き，時刻は 13 時 6 分または午後 1 時 6 分のように書く．使用が推奨される単位については、日本土壌肥料学会のサイトを参照すること.
21. 学会の大会などで口頭発表したことなどは脚注にする.
22. 研究が官公庁，財団，企業などによる研究費補助金，奨励金，助成金などを受けて行われた場合には，その旨を脚注にする.
23. 感謝の言葉などは本文末尾につける.

英文抄録原稿

24. 原著論文の英文抄録原稿は，A4 判 1 ページ 25 行とし，約 3 cm の余白を残して，表題，著者名（フルネーム），所属，語数 300 以内の英文要旨（原著論文のみ）および 5 語以内のキーワードを記人する．これらの英文表現は，投稿前に専門家による校閲を受けておくこと．キーワードはアルファベット順に配列する．様式は「WJSSPN サイト」から投稿票をダウンロードする.
25. 動植物名には，最初の記載の場合にのみ，ラテン語による学名（binomial または trinomial）を付する.
26. 土壌分類名には，FAO-UNESCO 方式あるいは USDA 方式のような，国際的方式による分類名を併記することが望ましい.
27. 英文の記載方式に関するその他の事項については，日本土壌肥料学会の欧文誌（Soi1 Science and Plant Nutrition）投稿規程を参考にする.

図　表

28. 表・図・写真などは必要最小限度とし，同一内容を表と図に重複して示すことは避ける.
29. 表・図・写真は，本文の挿入位置に貼り付ける.

30. 表は表計算ソフト等を使って作成し，オブジェクトとして本文の挿入位置に貼り付ける．空欄の多い表は避け，注を使うなどしてスペースの節約を図る．表の横幅は，片段組み（横 84 mm）または，全段組み（横 176 mm）とする．作成にあたっては，掲載時のイメージを考慮し，表中の線の太さは原則として 1 ポイントとし，読みやすい文字・数字の大きさにする．
31. 図は，適当なソフトを使って作成し，オブジェクトとして本文の挿入位置に貼り付ける．
32. 図の横幅は，片段組み（横 84 mm）または，全段組み（横 176 mm）とする．作成にあたっては，掲載時のイメージを考慮して図中の線の太さ，文字・数字の大きさを選ぶ．
33. 表の番号は「表 1」のようにし，タイトルは表の上に記入し、注は表の下に記入する．図または写真の番号は「図 3」，「写真 2」のようにし，タイトルは，図または写真の下に独立したオブジェクトとして記入する．なお，凡例は原則として図，写真の中に記入し、注はタイトルの下に記入する．
34. 地図には定尺をつけ，何万分の 1 などの縮尺を指定しない．顕微鏡写真などには定尺をつけ，何倍などの拡大率を指定しない．その他，ウェブサイト表示の特性に配慮すること．

引用文献

35. 文献は本文のあとにまとめて著者名のアルファベット順に書く．本文中の引用箇所では，著者名のあとに発表年を括弧書きで添えるか[例：原・土屋(2007)は･･.，Bertsch and Seaman (1999)によれば,･･.1，文章の途中または末尾に著者名と発表年を括弧書きで入れる[例：・・・　が明らかにされている（Kookana *et al.,*1994 ; 笛木ら，2007)]．特許は，発明者(あるいは出願人)(発行年)発明の名称，特許文献の番号を記載する．未発表・未受理のもの，私信は引用文献としては記載しない．
36. 和文誌の略名は農学進歩年報の用例により，欧文誌の略記は *Chemical Abstracts* による．ただし，発行後日の浅いもの，土壌肥料分野になじみのうすいものは，適宜正式名を用いる．
37. 書き方の様式は次の例による．

［雑誌］

藤川智紀・高松利恵子・中村真人・宮崎毅 2007.農地から大気への二酸化炭素ガス発生量の変動性とその評価．土肥誌,78,487-495.

Panno, S.V., Hackley, K.C., Kelly, W.R., and Hwang, H.-H.2006.1sotopic evidence of nitrate sources and denitrification in the Mississippi River, minois.*J.Environ.Qual.,*35,495-504.

［逐次刊行物］

Dahlgren,R.A.,Saigusa,M 。and ugolini, EC.2004.The nature, properties and

management of volcanic soils. *Adv.Agron.*, 82, 113－182.

［単刊書の章］

松森堅治 2005.地理情報システムを用いた窒素負荷予測モデル．波多野隆介・犬伏和之編 続・環境負荷を予測する，p.60-79.博友社，東京.

Roberts,D., Scheinost,A.C., and Sparks, D.L.2003.Zinc speciation in contaminated soils combining direct and indirect characterization methods. lnl H.M. Selim and W.L. Kingery (ed.)Geochemical and hydrological reactivity of heavy metals in soils, p.187－227.Lewis Publ., Boca Raton.

［単刊書(引用ページを示す場合)］

西尾道徳 2005.農業と環境汚染，p.148.農文協，東京.

Kyuma,K.2004.Paddy soil science, p.66.Kyoto univ. Press,Kyoto.

［ウェブ情報］

野菜茶業研究所 2006.野菜の硝酸イオン低減化マニュアル.
http://vegetea.naro.affrc.go.jp/joho/manua1/shousan/index.htm1

［特許］

鎌田淳・丸岡久仁雄・畑克利・浅野智孝・池田隆夫・東野信行・飯塚美由紀・冨樫直人 2010. 有機肥料およびその製造方法，特開 2010-241637(発明者が３名以上の場合は省略も可)

付則：本規程は 2016 年 6 月 20 日以降に投稿された原稿に適用される.